Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-22

日本語の分裂文における統語的派生と前提節の標示について

森山，倭成

(Citation)
神戸言語学論叢,15:95-114

(Issue Date)
2026-03-28

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/0100502633

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100502633

神戸言語学論叢 第15号
2026年 (令和8年) 3月
95–114頁

Kobe Papers in Linguistics Vol. 15
March 2026
pp. 95–114

日本語の分裂文における統語的派生と前提節の標示について

森山　倭成

鳴門教育大学

1. はじめに

日本語には、補文標識「の」によって導入される前提節と焦点部から構成される分裂文 (cleft construction) が存在する (原田 1970; Nakau 1973)。日本語の分裂文についての統語論研究では、Hoji (1987, 1990) 以降、その統語的特性を捉えるためのさまざまな分析が試みられてきた。本稿では、(i) 分裂文の統語的派生と (ii) 前提節の標示について考察し、(1) の主張を行う。

(1) a. 分裂文と「のだ」文は、統語的な派生関係にない。
　　b. 前提節は、題目標識だけでなく主格や対格による標示も可能である。

まず、分裂文の統語的派生については、空演算子移動分析 (Hoji 1990; Matsuda 1997; Kizu 2005; 森山 2022a/bなど) と「のだ」文派生分析 (Hiraiwa and Ishihara 2002, 2012; 平岩 2006など) がある。空演算子移動分析は、前提節における空演算子の移動を仮定している。一方で、「のだ」文派生分析は、分裂文を「のだ」文から統語的に派生する。本稿では、分裂文と「のだ」文が統語的な派生関係にないとする立場に立ち、空演算子移動分析を支持する。

次に、日本語における分裂文の前提節は、典型的には、題目標識 (topic marker) の「は」で標示される。そのため、一部の先行研究では、前提節を「は」以外では標示できないと考えられている (平岩 2006)。しかしながら、本稿では、小節や例外的格標示構文に関わるデータを通して、前提節の標示が題目標識に限られないことを示す。さらに、先行研究で不適格と考えられている前提節の主格標示のデータは、分裂文の焦点・前提構造と主格「が」の意味特性の相互作用から捉え直せることを論じる。

本稿の議論は、以下のように進める。第2節では、分裂文の統語的派生と前提節の標示に関する先行研究を概観し、2つの問いを設定する。第3節では、小節における分裂文の埋め込み可能性と前提節の対格標示について考察する。第4節では、ECM構文における分裂文のデータを示し、前提節が「は」「が」「を」のいずれでも標示可能であることを論じる。さらに、主格標示の前提節のデータに基づき、空演算子移動分析の優位性を主張する。第5節では、分裂文の焦点・前提構造と主格「が」の意味特性の観点から、前提節の主格標示の容認性について再考する。第6節は結語である。

2. 分裂文に関わる2つの問い

2.1. 分裂文の統語的派生

第2節では、分裂文についての先行研究を概観するとともに、本稿で取り組む2つの問いを提示する。Hoji (1987, 1990) は、「[X ～の] はYだ」の形式からなる構文を2種類に分けている。Yに格や後置詞を伴うものを分裂文 (cleft construction)、格や後置詞を伴わないものを擬似分裂文 (pseudo-cleft construction) と呼ぶ (黒田 1998: 33–34; Hiraiwa and Ishihara 2002, 2012; 平岩 2006も参照)。(2) の2つの文は、それぞれ、分裂文と擬似分裂文の具体例である。

(2) a. 太郎が出てきたのはそのビルからです。(分裂文)
b. 太郎が出てきたのはそのビルです。(擬似分裂文)

分裂文と擬似分裂文の区別は、島の効果の現れ方の違いに基づいている。(3) のように、分裂文および擬似分裂文のYは、同一指標の空範疇と長距離の依存関係を結ぶことができる。しかしながら、(4) からわかるように、複合名詞句などの島が介在するとき、分裂文では島の制約の効果が検出される一方で、擬似分裂文では検出されない。

(3) a. 花子が [太郎が e_i 出てきたと] 言ったのはそのビルから$_i$です。(分裂文)
b. 花子が [太郎が e_i 出てきたと] 言ったのはそのビル$_i$です。(擬似分裂文)

(4) a. *[[財宝が e_i 出てきた] 伝説] が残っているのはそのお城から$_i$です。(分裂文)
b. [[財宝が e_i 出てきた] 伝説] が残っているのはそのお城$_i$です。(擬似分裂文)

Hoji (1990) によれば、(4) における文法性の対比は、Xにおける移動の有無による。(5a) に示されるように、分裂文の前提節では、空演算子 (OP) の移動が起こる (Matsuda 1997; Kizu 2005; 森山 2022a/b)。[1] そのため、島の介在するケースにおいて島の効果が検知される。一方で、(5b) のように、擬似分裂文では、DPと関係付けられる空範疇が空代名詞*pro*として現れる。ゆえに、島の効果は発現しない。[2]

(5) a. [$_{CP}$ OP$_i$ [$_{TP}$ … t_i …] の]-は DP$_{-格/後置詞}$ だ (分裂文)
b. [… *pro*$_i$ … の]-は DP$_i$ だ (擬似分裂文)

分裂文の統語的派生には、異なる考え方もある。Hiraiwa and Ishihara (2002, 2012) は、分裂文が「のだ」文 (in-situ focus construction) から統語的に派生されるとしている (平岩 2006; Takahashi 2006, 2020; Tatsumi 2013; Hiraiwa and Kobayashi 2019; Noguchi 2025)。例えば、(6a) の分裂文は、(6b) の「のだ」文をソースとして派生的に得られる。

(6) a. 太郎が出てきたのはそのビルからだ。(分裂文)
b. 太郎がそのビルから出てきたのだ。(「のだ」文)

「のだ」文は、(7a) のような単一節構造をもつ。補文標識「の」はFinPの主要部を、コピュラ「だ」は焦点辞 (focus particle) としてFocPの主要部を占める。分裂文の焦点部に現れる構成素は、TPの内部に生成されたあと、(7b) のように、焦点移動 (focus movement) を経てFocP指定部に移動する。さらに、補文標識「の」の投射するFinP (網掛け部分) がTopP指定部に題目移動することで、(7c) に示されるような分裂文の構造が完成する (日本語における題目化の統語論については、Kishimoto (2009a) やSaito (2012) が詳しい)。

(7) a. [$_{\text{FocP}}$ [$_{\text{FinP}}$ [$_{\text{TP}}$ … 焦点部 …] の] だ]
b. [$_{\text{FocP}}$ 焦点部$_{\text{i}}$ [$_{\text{FinP}}$ [$_{\text{TP}}$ … t_{i} …] の] だ]
c. [$_{\text{TopP}}$ [$_{\text{FinP}}$ [$_{\text{TP}}$ … t_{i} …] の]-は$_{\text{j}}$ [$_{\text{FocP}}$ 焦点部$_{\text{i}}$ t_{j} だ]]

この分析は、分裂文における島の効果を焦点移動仮説によって説明できる。

「のだ」文と分裂文は、伝統的に別々の構文として取り扱われるのが一般的であった。対照的に、(7) の分析は、「のだ」文と分裂文が統語的に同根であることを示している。本稿では、「のだ」文派生分析の妥当性について検討するために、(8) に掲げる問いを立てる。

(8) 問い1：日本語の分裂文は、「のだ」文から統語的に派生されるのか。

この問いについては第3節と第4.2節において検討する。「する」の選択する小節を用いて分裂文と「のだ」文の埋め込み可能性を確認すると、文法性に明確な差異が現れる。また、分裂文の前提節は「が」格による標示が可能である。それらの事実に基づき、分裂文と「のだ」文が統語的な派生関係にないことを論じる。

2.2. 分裂文における前提節の標示

「のだ」文派生分析を採用している平岩 (2006: 254) は、分裂文の前提節を標示する「「は」は何者にも置換され得ないように思われる」と記述している。(9a) は、分裂文を構成する前提節を主格「が」で標示できないことを示している。一方で、(9b) から確認できるように、擬似分裂文の「の」句を「が」で標示するのは可能である。

(9) a. *太郎が叱ったのが花子をです。(分裂文)
b. (花子ではなくて) 太郎が買ったのがこの本です。(擬似分裂文)
(平岩 2006: 254; 下線は筆者)

同様の観察は、熊本 (1989a) と砂川 (1995, 2005) でもなされている (ただし、砂川 2005: 237も参照のこと)。(10) は、後置詞「から」、「を」格、「に」格を伴う構成素が焦点部に置かれているため、擬似分裂文ではなく分裂文である。平岩 (2006) に従えば、(10) の不適格性は、題目標識「は」ではなく主格「が」で前提節が標示されていることによる。

(10) a. *火事が起きたのが寝タバコからだった。
b. *太郎が愛しているのが花子をだ。
c. *花子が手紙を書いたのが次郎にだ。
(熊本 1989a: 18; 下線は筆者)

しかしながら、例えば (10c) が関係節に埋め込まれた (11) の例は、さほど不自然に感じられない。さらに付け加えると、(12) のような分裂文の実際の用例では、主格「が」による前提節の標示が許容されている。そのため、「が」格使用の容認度は文全体の情報構造や談話的背景に依存する可能性が高い。

(11) 花子が手紙を書いたのが次郎にだった可能性

(12) a. ただ撮影に参加するのが終盤からだったので、アウェー感があってものすごく緊張していたんです。
(NHK「トップ/放送史/人物/小西真奈美」
https://www2.nhk.or.jp/archives/articles/?id=D0009120725_00000 2025年10月7日最終閲覧; 下線は筆者)
b. 誰がどう負担するか、税金も含めて、個別に決めることは難しく、やむを得ず一定程度、一律で対応してきたのがこれまでだと思います。
(財務省「トップページ/広報・報道/広報誌「ファイナンス」/令和5年12月号/特集 Future TALK ○○さんと日本の未来とイマを考える」
https://www.mof.go.jp/public_relations/finance/202312/202312d.html 2025年10月7日最終閲覧; 下線は筆者)
c. 長いと、お風呂の後乾かしたり、洗ったりするのが赤ちゃんとだと大変だし、短いと、授乳の時、うっとうしいし・・・で、一番良かったのは、セミロングで、耳にかけられる、ゴムで括れる長さでした。
(pigion.info はじめての妊娠・育児情報サイト「ホーム/お悩み相談室/出産後の髪型について。」
https://pigeon.info/soudan/soudan-27562.html 2025年10月12日最終閲覧; 下線は筆者)

このような背景から、本稿では、2つ目の問いとして (13) を設定する。

(13)　問い2：題目標識「は」以外による前提節の標示は可能か。

この問いに関して、第3節と第4.1節では、「する」が選択する小節および例外的格標示構文における分裂文の振る舞いを通じて、格標識 (case marker) による前提節の標示が可能であることを示す。第5節では、(9a) と (10) の奇異さに、主に、主格「が」の意味特性と分裂文の焦点・前提構造が関わっていると論じる。

3.　「する」が選択する小節

本節では、小節に関わるデータを通して、分裂文と「のだ」文が統語的な派生関係にないことに加え、分裂文の前提節が「を」格で標示可能であることを確認する。(14a) のように、「する」は、コピュラの「に」または「と」によって導入される小節 (SC) を選択できる。

(14)　a.　太郎は [$_{SC}$ その答えを正解 {に/と}] した。
　　b.　*太郎は [$_{SC}$ その答えが正解 {に/と}] した。

(14a) では、SC主語が「を」格で標示されている。一方で、(14b) からわかるように、主語を「が」格で標示することはできない (Kikuchi and Takahashi 1991)。(15) のように、「思う」の選択する小節でも同じことが観察される。一般的に、日本語の主格は、定形のT主要部が認可する (Takezawa 1987)。(14) と (15) の小節内で主格主語が許容されないのは、定形のT主要部が欠如しているからであるということができる。

(15)　a.　私は [$_{SC}$ 太郎を賢く] 思う。
　　b.　*私は [$_{SC}$ 太郎が賢く] 思う。

(16a) に見られるように、「する」の選択する小節は、分裂文の埋め込みが可能である (森山 2022a/b)。焦点部には後置詞句が生じているので、この構文は分裂文である。(14) と (15) と同じように、前提節は「を」格で標示され、「が」格による前提節の標示は不可能である。

(16)　a.　そのディレクターは [ゲストが登場するのをあちらの扉から {に/と}] した。
　　b.　*そのディレクターは [ゲストが登場するのがあちらの扉から {に/と}] した。

分裂文の特徴の一つである島の効果は、小節内においても検出される。(17a) のように、焦点部「あちらの扉から」は、同一指標をもつ空範疇と長距離の依存関係を結べる。一方で、複合名詞句が介在する (17b) では、島の効果が探知されるので、小節内においても分裂文の統語的派生に移動が関与しているといえる。

(17) a. そのディレクターは [[ゲストに e_i 登場してもらうよう] お願いするのをあちらの扉から$_i$ {に/と}] した。
b. *そのディレクターは [[[ゲストに e_i 登場してもらう] こと] をお願いするのをあちらの扉から$_i$ {に/と}] した。

(16a) は、題目標識「は」だけでなく対格「を」によっても分裂文の前提節を標示できることを示している。第2節で概観したように、分裂文の先行研究では、前提節の標示は題目標識によってのみ可能であると記述されている。ところが、実際には対格でも前提節を標示することは可能なので、先行研究の記述は不十分であるといえる。

さらに言えば、小節内における分裂文は、「のだ」文から派生的に形成されると考えにくい。(18) のように、小節への「のだ」文の埋め込みは、許容されないからである。分裂文が「のだ」文から派生されるならば、分裂文のソースとなる「のだ」文についても埋め込みが可能であることが期待される。不適格文の (18) は、分裂文と「のだ」文を統語的に関係付けるアプローチに対して疑問を投げかける。

(18) *そのディレクターは [特別ゲストがあちらの扉から登場するの {に/と}] した。

分裂文と「のだ」文の埋め込み可能性に関わる対比は、分裂文と「のだ」文が統語的に別々の構文であることを示唆している。分裂文を「のだ」文から派生する分析では、このコントラストを適切に捉えるための補助的な説明が必要となる。一方で、分裂文と「のだ」文を統語的に関係付けない空演算子移動分析では、当該の文法性の対比は分析に支障をきたすことがない。本稿では、空演算子移動分析を採用し、分裂文と「のだ」文は統語的に独立した構文であると考える。[3] この点については、第4.2節で再検討する。

4. 例外的格標示構文

4.1. 例外的格標示構文と分裂文

本節では、例外的格標示 (ECM) 構文に関わるデータを用いて、分裂文の前提節の標示が題目標識に限定されないことを示す。(19) は、ECM構文の例である。埋め込み節主語は、主格「が」のみならず対格「を」でも標示できる。「を」格は、埋め込み節の述語ではなく主節述語「考える」が認可する。埋め込み節主語の格認可を主節述語が担うことから、伝統的に、例外的格標示構文と呼ばれている (Kuno 1976; Kaneko 1988; Tanaka 2002; Takano 2003; Hiraiwa 2005; Kishimoto 2020, 2021; Takahashi 2021; 岸本 2024など多数)。

(19) 太郎は [$_{CP}$ 花子 {が/を} 加害者であると] 考えている。

(20) では、認識動詞「考える」の補部に分裂文が生起している。注目すべきは、前提節の標示が題目標識「は」、主格「が」、対格「を」のいずれでも可能な点である。第3節では、前提節を「を」格で標示できることを確認した。今回のケースでは、例外的に付与された「を」格に加えて、例外的な格標示が適用されていない「が」格も利用可能である。主格と対格による標示は、第2.2節で見た先行研究の記述からは予測されない。

(20) a. 私は [$_{CP}$ その人が出てくるのはあちらの扉からだと] 考えた。
b. 私は [$_{CP}$ その人が出てくるのがあちらの扉からだと] 考えた。
c. 私は [$_{CP}$ その人が出てくるのをあちらの扉からだと] 考えた。

(21a,b) のように、前提節の標示のされ方にかかわらず、島の効果が検出される。(21c) は、複文であるが、島の介在しない環境なので、島の効果が生じない。(21) は、動詞の補部に埋め込まれた分裂文の派生においても移動が起こることを示唆している。

(21) a. *私は [花子が [その人が e_i 出てくる時間] を覚えているの {は/が/を} あちらの扉から$_i$だと] 考えた。
b. *私は [[その人が e_i 出てくる前に] 雨が降り始めたの {は/が/を} あちらの扉から$_i$だと] 考えた。
c. 私は [花子が [その人が e_i 出てくると] 思っているの {は/が/を} あちらの扉から$_i$だと] 考えた。

「が」格は、埋め込み節内の定形のT主要部が与える一方で、「を」格は、主節の動詞が与える。前提節につく対格を主節動詞が認可していることは、「方」名詞化、軽動詞構文および二重「を」格制約を通して確認できる。まず、日本語の動詞句は、派生接辞「方」を用いた名詞化が可能である (井上 1976: 249–251; Sugioka 1992; 影山 1993; Kishimoto 2006, 2009b; Miyagawa 2020; 瀧田 2020)。たとえば、動詞「食べる」の連用形に派生接辞「方」を接続させると、「食べ方」という名詞句ができあがる。さらに、動詞の項が含まれた「太郎がパンを食べる」を名詞化すると、主格と対格が吸収され、「太郎のパンの食べ方」のように、各項が属格で標示される。属格標示は、同一節のものに限られ、項の内部に深く埋め込まれた構成素に対しては不可能である。そのため、「太郎が [お化けが出たと] 言う」のような複文を「方」名詞化しても、「太郎の [お化け {が/*の} 出たと] の言い方」となり、埋め込み節中の主語は属格にならない。

ECM構文を用いて、「方」名詞化の可否を確認すると、(22) のように、埋め込み節主語は「が」格でしか標示され得ない。(22b) の不適格さは、節境界を超えた属格付与が不可能であることによる。加えて、名詞化を受ける認識動詞「考える」は、派生接辞「方」から対格素性を吸収される。(22c) で主節動詞による対格付与が禁止されるのはこのためである。

(22) a. 太郎の [花子が加害者であると] の考え方
b. *太郎の [花子の加害者であると] の考え方
c. *太郎の [花子を加害者であると] の考え方

分裂文の前提節についても同様のことが当てはまる。(23) のように、前提節が主格で標示されるパターンのみが許される。属格と対格の付与が不可能なのは、(22b,c) と同じ理由である。(22c) との比較から、(20c) における前提節の対格は、主節の認識動詞「考える」が認可していると結論づけることができる。

(23) a. 太郎の [その子が e_i 恐れているのが自分の将来について$_i$であると] の考え方
b. *太郎の [その子が e_i 恐れているのの自分の将来について$_i$であると] の考え方
c. *太郎の [その子が e_i 恐れているのを自分の将来について$_i$であると] の考え方

ちなみに、ECM構文を伴う名詞化は、英語でも許容されない (Postal 1974: 346; Ouhalla 1999: 198)。(24a,b) は、(25a,b) を名詞化した例である。ECM化の起こっていない (24a) は容認可能であるが、ECM化された (24b) は不適格である。

(24) a. My belief that Haruhito is intelligent
b. *My belief Haruhito to be intelligent

(25) a. I believe that Haruhito is intelligent.
b. I believe Haruhito to be intelligent.

派生名詞 *belief* には、対格付与能力がない。また、埋め込み節のT主要部を占める不定詞 *to*は、非定形なので、主格の付与ができない。*Haruhito* の格が認可されないため、(24b) は、格フィルター違反として排除される。

次に、日本語には、動詞的名詞 (VN) と軽動詞「する」からなる軽動詞構文が存在する (Grimshaw and Mester 1988; 影山 1993; 岸本 2019a/b; Kishimoto 2025など多数)。(26) のように、VN「発言」は、対格を伴う形式と伴わない形式の両方が可能である。

(26) a. 太郎はその件について発言をした。 b. 太郎はその件について発言した。

軽動詞が用いられる場合にも、ECM構文を形成できる。(27) では、埋め込み節主語が主格または対格で標示されている。

(27) 太郎が [花子 {が/を} 加害者であると] 発言した。

日本語のECM構文は、「思う」「考える」といった認識述語か「言う」「述べる」といった発言述語の使用を必要とする。軽動詞構文で用いられる「する」は、どちらのタイプの述語にも該当しないため、動詞的名詞「発言」がECM化をもたらしていると言える。一方で、対格は軽動詞「する」によって与えられていると考えなければならない。(28) からわかるように、動詞的名詞に対格付与能力がないからである。

(28) a. 太郎の [花子が加害者であると] の発言
b. *太郎の [花子を加害者であると] の発言

軽動詞構文では、分裂文を用いたECM化も可能である。(29) の補文には、分裂文が埋め込まれている。前提節には、「は」「が」「を」のいずれのマーカーも用いることができる。

(29) 太郎は [タクシーが e_i 来るの {は/が/を} 家の前まで$_i$であると] 発言した。

(30) は、動詞的名詞「発言」を主要名詞とする名詞修飾の例である。(28) と同じように、「発言」には対格付与能力がないため、前提節の対格を認可できない。[4]

(30) a. 太郎の [タクシーが e_i 来るのが家の前まで$_i$であると] の発言
b. *太郎の [タクシーが e_i 来るのを家の前まで$_i$であると] の発言

このことは、(29) における前提節の対格を「する」が認可していることを示している。

最後に、二重「を」格制約の効果を通しても、前提節の対格を主節動詞が認可することを確認できる。(31) は、いわゆる壁塗り構文の例で、「に・を」の格パターンと「で・を」の格パターンの両方が可能である (奥津 1981; Fukui et al. 1985; 岸本2001; Kishimoto 2001a)。(31a) では、場所を表す構成素が「に」で標示されており、道具を表す構成素が「を」で標示されている。一方、(31b) では、道具項の「ペンキ」が後置詞「で」で標示されており、場所項が「を」で標示されている。

(31) a. 太郎は壁にペンキを塗った。
b. 太郎はペンキで壁を塗った。

場所項と道具項は、「を」による標示が可能であるが、両者を同時に「を」で標示することは不可能である。(32) における「を」格の多重生起は、二重「を」格制約によって排除される (Harada 1973; 柴谷 1978; Hiraiwa 2010)。

(32) *太郎は壁をペンキを塗った。

ただし、格の認可子が異なれば、「を」格の多重生起が可能となることに注意しなければならない。(33) では、「を」格で標示される構成素が主節と埋め込み節のそれぞれに現れている。主節の対格名詞は軽動詞「する」から、埋め込み節の対格名詞は塗装動詞「塗る」から認可を受けるので、二重「を」格制約に抵触しないのである。

(33) 太郎は [次郎が壁にペンキを塗ったと] 発言をした。

ECM構文における対格主語は、主節の対格名詞と衝突を引き起こす。(34b) では、ECM主語が「を」格で標示されているが、主節の動詞的名詞も「を」格で標示されている。そのため、二重「を」格制約の効果が検出される。このことは、ECM主語と動詞的名詞を標示する対格の認可子が軽動詞「する」であることを示している。

(34) a. 太郎は [花子が加害者だと] 発言をした。
b. ?*太郎は [花子を加害者だと] 発言をした。

同様に、二重「を」格制約の効果は、ECM主語に分裂文の前提節が生起するときにも確認できる。(35) は、ECM環境に分裂文が埋め込まれたケースである。(34) と同じように、「を」格が二重に現れると、二重「を」格制約の効果が生じる。そのため、分裂文の前提節についても「する」が対格を与えているということができる。

(35) a. 私は [その人が e_i 出てくるのがあちらの扉から$_i$だと] 発言をした。
b. ?*私は [その人が e_i 出てくるのをあちらの扉から$_i$だと] 発言をした。

以上、第4.1節では、ECM構文に関わるデータを用いて、分裂文における前提節の標示が題目標識「は」に縛られていないことを示した。具体的には、前提節が主格「が」および対格「を」によっても標示可能であることが明らかとなった。このことは、前提節の標示が先行研究の記述よりも多様であることを示している。さらに、「方」名詞化、軽動詞構文、二重「を」格制約の診断を通じて、前提節に現れる対格を主節述語が認可していることを論証した。

4.2. 主格標示の前提節と分裂文の派生

第4.1節では、分裂文の前提節を主格で標示できることを確認した。この事実は、「のだ」文派生分析の再検討を促すものである。(36) に再掲するように、Hiraiwa and Ishihara (2002, 2012) は、FocP指定部への焦点移動とTopP指定部への題目移動を仮定している。

(36) a. [$_{FocP}$ [$_{FinP}$ [$_{TP}$ … 焦点部 …] の] だ]
b. [$_{FocP}$ 焦点部$_i$ [$_{FinP}$ [$_{TP}$ … t_i …] の] だ]
c. [$_{TopP}$ [$_{FinP}$ [$_{TP}$ … t_i …] の]-は$_j$ [$_{FocP}$ 焦点部$_i$ t_j だ]]

分裂文の前提節が「が」格で標示されるケースでは、題目移動は起こらないので、前提節は、TopP指定部に牽引されない。(37) は、(36b) の焦点移動後の構造を表しており、焦点部に生起する構成素が網掛け部分の前提節から摘出されている。この構造の問題点は、前提節の主格を認可する定形のT主要部が不在であることである。前提節の内部に定形のT主要部が生じているが、このT主要部は、FinPをC統御していないので、Agreeを通して主格を認可できない。したがって、この構造は、前提節を主格で標示できないという誤った予測をする。

(37) [$_{FocP}$ 焦点部$_i$ [$_{FinP}$ [$_{TP}$ … t_i … T] の]-**が** だ]

「のだ」文派生分析にはもう一つあるが、そこでも類似の問題が生じる。Tatsumi (2013) は、「のだ」文の統語構造として (38a) を仮定している。Hiraiwa and Ishihara (2002, 2012) の単一節分析とは異なり、複文構造が想定されており、主節のPred主要部に「で」、V主要部に「あ」、T主要部に「る」が生起している。なお、コピュラの「だ」は、「である」の縮約形とみなされている (Nishiyama 1999)。Hiraiwa and Ishihara (2002, 2012) と同じく焦点移動が仮定されていることが (38b) からわかる。(38c) に示されているように、網掛け部分の前提節は、PredP内に基底生成されたあとに、TP指定部を経由して、TopP指定部に着地する。

(38) a. [$_{TP}$ [$_{VP}$ [$_{PredP}$ [$_{CP}$ … 焦点部 … の] で$_{Pred}$] あ$_V$] る$_T$]
b. [$_{TopP}$ [$_{FocP}$ 焦点部$_i$ [$_{FinP}$ [$_{TP}$ [$_{VP}$ [$_{PredP}$ [$_{CP}$ … t_i … の] で$_{Pred}$] あ$_V$] る$_T$] Fin] Foc] Top]
c. [$_{TopP}$ [$_{CP}$ … t_i … の]$_j$-は [$_{FocP}$ 焦点部$_i$ [$_{FinP}$ [$_{TP}$ t_j [$_{VP}$ [$_{PredP}$ t_j で$_{Pred}$] あ$_V$] る$_T$] Fin] Foc] Top]

(39) では、前提節が主格で標示されている。(37) の場合とは異なり、前提節をC統御する定形のT主要部が存在しているので、主格認可が可能である。

(39) [$_{TopP}$ [$_{FocP}$ 焦点部$_i$ [$_{FinP}$ [$_{TP}$ [$_{VP}$ [$_{PredP}$ [$_{CP}$ … t_i … の]-**が** で$_{Pred}$] あ$_V$] る$_T$] Fin] Foc] Top]

しかしながら、この分析には過剰生成の問題がある。一般的に、日本語の主格主語は、述語が投射する句の内部にとどまる (Fukui 1986; Kuroda 1988; Aoyagi and Ishii 1994) か、TP指定部にA-移動する (Kishimoto 2001b, 2007, 2008, 2010, 2017, 2018; 岸本 2005, 2024) と考えられている。そうすると、「が」格標示の前提節は、(40) のように、PredP、VP、TPのいずれかの指定部を占めるといえる。ところが、前提節がいずれの構造位置に現れるにせよ、この分析は、「*その扉から [$_{CP}$ その人が出てくるの]-<u>が</u>である (と太郎は考えた)」という非

文を過剰に生成する (かき混ぜによって前提節を文頭に動かせば適切な語順が得られるが、その場合、義務的なかき混ぜを仮定する必要がある)。結果的に、Tatsumi (2013) の統語的派生でも「が」格標示の前提節についてのデータを的確に捉えられない。

(40) a. [$_{TopP}$ [$_{FocP}$ 焦点部$_i$ [$_{FinP}$ [$_{TP}$ [$_{VP}$ [$_{PredP}$ [$_{CP}$ … t_i … の]-が でPred] あV] るT] Fin] Foc] Top]
b. [$_{TopP}$ [$_{FocP}$ 焦点部$_i$ [$_{FinP}$ [$_{TP}$ [$_{VP}$ [$_{CP}$ … t_i … の]-が [$_{PredP}$ でPred] あV] るT] Fin] Foc] Top]
c. [$_{TopP}$ [$_{FocP}$ 焦点部$_i$ [$_{FinP}$ [$_{TP}$ [$_{CP}$ … t_i … の]-が [$_{VP}$ [$_{PredP}$ でPred] あV] るT] Fin] Foc] Top]

一方で、空演算子移動分析では、「で」の投射する句の補部に焦点部が生起する (森山 2022a/b)。[5] 「が」格標示の前提節は、同じ投射の指定部に基底生成され、T主要部とAgreeしたあと、(41b) のように、T主要部のEPP素性の要請によりTP指定部にA-移動する。(題目標識で標示される前提節は、(41b) の位置からTopP指定部まで移動する。)

(41) a. [$_{TP}$ [$_{VP}$ [$_{PredP}$ [$_{CP}$ OP$_i$ [$_{TP}$ … t_i …] の]-が [$_{Pred'}$ 焦点部 でPred]] あV] るT]
b. [$_{TP}$ [$_{CP}$ OP$_i$ [$_{TP}$ … t_i …] の]-が$_j$ [$_{VP}$ [$_{PredP}$ t_j [$_{Pred'}$ 焦点部 でPred]] あV] るT]

このように、空演算子移動分析は、前提節の標示に関する事実を捉えることができる (「のだ」文の統語構造については、森山 (2021) を参照)。

以上、第4.2節では、分裂文の前提節が主格で標示される場合の統語的派生について検討した。「のだ」文派生分析 (Hiraiwa and Ishihara 2002, 2012; Tatsumi 2013) は、前提節の主格標示を十分に説明できないことを確認した。一方で、空演算子移動分析では、当該の事実を自然に導出できることを示した。次節では、分裂文における格標示と情報構造の対応関係について検討する。

5. 分裂文の焦点・前提構造と主格「が」の意味特性

本節では、前提節の「が」格標示に課される条件について議論する。この点について考えるために、先行研究が不適格と判定している例と本稿で適格と判定した例を (42) と (43) に列挙している。(42) と (43) を比較すると、前提節の「が」格標示は、主節において容認度が低く、従属節において容認度が向上することがわかる (cf. 砂川 2005: 237)。

(42) a. *太郎が叱ったのが花子をです。(平岩 2006: 254)
b. *火事が起きたのが寝タバコからだった。[6] (熊本 1989a: 18)
c. *太郎が愛しているのが花子をだ。(熊本 1989a: 18)
d. *花子が手紙を書いたのが次郎にだ。(熊本 1989a: 18)

(43) a. 太郎は司会者が登場するのがあちらからだと思っている。
b. 花子が手紙を書いたのが次郎にだった可能性
c. ただ撮影に参加するのが終盤からだったので、… ((12a) より一部抜粋)
d. …やむを得ず一定程度、一律で対応してきたのがこれまでだと思います。
((12b) より一部抜粋)
e. …お風呂の後乾かしたり、洗ったりするのが赤ちゃんとだと大変だし、…
((12c) より一部抜粋)

(42) の容認度の低さには、主格「が」の意味特性と分裂文の焦点・前提構造の双方が関係している。主格「が」に総記 (exhaustive listing) と中立叙述 (neutral description) の用法があることは周知のとおりである (久野 1973)。(44) に例示するように、他の人や物ではなく、主格標示される構成素の指示対象 (のみ) が…であるという意味を表す場合を総記といい、観察できる動作・状態を話し手が中立的に述べる場合を中立叙述という。

(44) a. 太郎が天才だ。(総記)
b. 雨が降っている。(中立叙述)

主節に現れる分裂文では、前提節を主格で標示すると容認度が低下する一方で、擬似分裂文では、(45) のように、主格標示が可能である (熊本 1989a/b; 砂川 1995; Hasegawa 1997)。この場合の主格は、総記的解釈が優勢である。排他性 (exhaustivity) の意味を含意する総記は、同定焦点 (identificational focus) の一種と考えられる。同定焦点は、焦点の一種であり、文脈や状況の中で考えられるいくつかの候補のうち、実際に当てはまるものを排他的に特定する役割を持つ (É. Kiss 1998)。たとえば、(45) では、「が」を伴う「お寿司を食べたの」全体が同定焦点として解釈される。文脈上、太郎の行為について複数の候補が想定される中で、「お寿司を食べた」という行為だけが真であることが伝達される。

(45) [お寿司を食べたの] が太郎だ。
↑
総記<同定焦点>

同様に、主格で標示された (42) の前提節も同定焦点として読み込まれるといえる。しかしながら、一般に、分裂文で同定焦点として働くのは、焦点部である (É. Kiss 1998)。(46) が不適格なのは、総記の「が」で標示された前提節と焦点部の両方が同定焦点として読み取られることで、焦点・前提 (focus-presupposition) の非対称構造が構築できなくなるからである。一方、擬似分裂文では、焦点・前提構造の形成が必ずしも課されないため、総記の「が」による標示が可能である。(擬似分裂文の情報構造については、北原 (1981: 258) も参照。)

(46) *[太郎が叱ったの] が 花子を です。
前提 焦点<同定焦点>
総記<同定焦点>

上記の説明では、(43) の容認度が向上することを捉えられないと考えたくなるかもしれない。しかしながら、中立叙述・総記の「が」の区別は、従属節では中和されることが指摘されている (久野 1973: 33)。(47) の埋め込み節の主格名詞は、総記としてだけでなく、中立叙述としても解釈できる。総記的解釈は、たとえば、太郎、花子、夏子の3人がいるとして、太郎のみが天才であるという意味を表す。一方で、中立叙述的解釈は、単に太郎の性質を述べるだけで、他の人物がその性質に当てはまらないということは含意しない。(44a) の主節における「が」格標示の例は、総記的解釈が優位であるが、そのような文を従属節に埋め込むと、総記だけでなく、中立叙述の読みも得られるようになるのである。

(47) 次郎は [太郎が天才だと] 言った。 (cf. (44a))

そうすると、前提節の「が」格標示が従属節内において許容される事実は、従属節における総記・中立叙述の対立の中和に起因しているということができる。(43) に列挙している例文では、分裂文の前提節が「が」格で標示されている。主節において優勢な総記の読みは、従属節に埋め込まれることで希釈されるため、中立叙述的解釈も可能となる。中立叙述の「が」格は、総記とは異なり、標示される構成素を同定焦点化しない。そのため、従属節では情報構造上の障害が起こることなく、適格な文が得られる。[7, 8, 9]

以上の観察から、主節の分裂文において前提節を主格「が」で標示した場合の不自然さは、「が」の総記的解釈が前提節を同定焦点として解釈させ、分裂文本来の焦点・前提構造の構築を妨害するためであると考えられる。一方で、従属節では総記用法と中立叙述用法の区別が中和されるため、前提節の「が」が中立叙述として解釈されやすくなる。その結果、前提節を同定焦点として解釈させる圧力が弱まり、高い容認度を示すことになる。したがって、前提節の主格標示の容認度は、単に統語上の制約によるものではなく、「が」の意味特性と分裂文の焦点・前提構造の整合性に基づいて説明されるべきである。

6. 結語

本稿では、日本語の分裂文について、統語的派生と前提節の標示の両面から再検討を行った。まず、小節やECM構文に関わるデータは、分裂文が「のだ」文から派生されるとする「のだ」文派生分析を支持せず、空演算子移動分析が妥当であることを示している。また、前提節の標示については、「は」に限らず「が」や「を」も用いられることを確認した。主格の「が」については、主節では不自然であるが、従属節では容認されやすいという分布が

見られた。この違いは、「が」の総記用法と中立叙述用法の対立が従属節では中和されること、そして、分裂文における焦点・前提構造との整合性が影響していると考えられる。以上の考察から、分裂文は「のだ」文とは独立した構文であり、前提節の標示は「は」「が」「を」のいずれも文法的に可能であるという結論に至った。

日本語の記述文法研究では、「の」句が題目標識で標示される構文は「は」分裂文、「が」格標示される構文は「が」分裂文と呼ばれている (熊本 1989a/b; 砂川 1995, 2005)。(48) に示されるように、「は」分裂文・「が」分裂文は、それぞれ、本稿の分類における分裂文・擬似分裂文のどちらにも該当しうる。ただし、「が」分裂文が本稿の分類における分裂文として機能するのは、(分裂文の焦点・前提構造に影響を及ぼさない) 中立叙述的解釈を「が」が受ける場合に限る。

(48)

本稿の分類		「の」句の標示に基づく分類
分裂文	⇐	「は」分裂文
擬似分裂文	⇐	「が」分裂文 (点線は、中立叙述の解釈のみ)

「は」分裂文と「が」分裂文は、「の」句の標示に着目した分類である。しかし、本稿で示したように、「の」句は「を」格での標示も可能である。標示に基づく分類に立脚すると、新たに「を」分裂文のような構文を立てる必要が生じる。一方で、本稿の分類法は、「の」句の標示に依存するものではないため、「を」格標示専用の構文を新たに設定することなく、分裂文と擬似分裂文の2分類を保持することができる。

註

* 本稿の内容の一部は、筆者が神戸大学大学院人文学研究科に在籍していた際に着想を得たものである。当時、指導教員であった岸本秀樹先生から多くのご指導と貴重なご助言を賜った。ここに感謝の意を表する。本稿の改訂にあたり、嘉藤優太氏から文章表現や内容について有益なご助言をいただいた。ここに厚く御礼申し上げる。なお、本稿の内容に関する誤りや不備がある場合、その責任はすべて筆者に属する。また、本研究は、JSPS科研費JP24K16058の助成を受けている。

1 分裂文における「の」が補文標識である点については、Murasugi (1991) や吉村 (2001) を参照。

2 Kizu (2005) は、擬似分裂文の派生にも移動が関与していると論じており、擬似分裂文と分裂文を統一的に扱うことを試みている。この点は、本稿の議論に特に影響を与えないので、深く立ち入らない。

3 「のだ」文と分裂文が互いに異なる構文であることは、(i) のデータからもうかがえる。(i) では、動詞「遊ぶ」に丁寧語「ます」が後続している。このケースでも、「のだ」文と分裂文とで容認度に対比が見られる (森山 2022a/b)。

(i) a. *[太郎が花子と遊びました] のです。(「のだ」文)

b. [太郎が e_i 遊びましたの]-は 花子と$_i$です。(分裂文)

森山 (2022a/b) は、分裂文の補文標識「の」がTPまたは丁寧語の認可に関わるAddrPを選択できるのに対し、「のだ」文の「の」は、TPのみを補部に選択できるとしている。なお、「のだ」文についての記述研究は、三上 (1953)、久野 (1973)、田野村 (1990)、野田 (1997) が詳しい。

4 熊本 (1989a: 18–19) は、前提節が「が」で標示されるときにも、焦点部に「から」句が現れれば容認される場合があることを記述している。熊本 (1989a) によると、「から」句は後置詞句ではなく名詞句であるため、例外的に焦点部への生起が認められる。しかし、実際には、(23) や (30) のように、「から」句以外の後置詞句でも焦点部に生起できる。

5 厳密に言えば、森山 (2022a/b) は、PredP仮説に批判的な立場であり、Den Dikken (2006) のRP (Relator Phrase) 仮説を踏襲した分析を行っている (Harada 2016も参照)。

6 「火事が起きたのがなんと寝タバコからでした！」のように、感嘆副詞「なんと」の挿入によって文が完全に容認可能になるとする話者も存在する (註7も参照)。

7 主節で用いられる分裂文では、「が」格の総記的解釈が優位であるが、中立叙述的解釈が完全に不可能というわけではない。熊本 (1989a: 19) は、(i) の小説からの一節を引用している。

(i) 東武特急「けごん」に乗って日光・鬼怒川方面に出掛けていくとき、車窓にうつる景色に不安といらだちを感じはじめるのが、曳舟のあたりからです。(泉麻人『東京23区物語』)

筆者の判断では、(i) における「が」格は、総記ではなく中立叙述的に解釈できる。そのため、情報構造上の不具合が生じず、適格文と判定されるのである。主節における中立叙述解釈を誘発する語用論的条件は、現時点で不明である。

8 (ia) では、前提節が主格で標示されており、焦点部が「を」格を伴っている。少なくとも筆者にとって、(ia) は容認可能である。

(i) a. 太郎は [[周りが批判しているの]-が自分のことをだと] 勘違いした。
b. %太郎が食べたのはピザをだ。

ただし、「を」格を伴う焦点部を容認しない話者、あるいは、容認度が低いと判定する話者が存在する (Sadakane and Koizumi 1995; Nishiyama et al. 1996; Kizu 2005: 212)。(ib) を容認しない話者にとっては、(ia) も容認度が低く感じられる可能性があるため、註釈程度にとどめておく。

9 第3節と第4節では、前提節が対格で標示されるケースを見た。対格は、総記と中立叙述の区別がないため、前提節の主格標示と同じ問題は発生しない。

参考文献

井上和子. 1976.『変形文法と日本語 (上)』東京：大修館書店.
奥津敬一郎. 1981.「移動変化動詞文―いわゆるspray paint hypallageについて―」『国語学』127, 21–33.
影山太郎. 1993.『文法と語形成』東京：ひつじ書房.
岸本秀樹. 2001.「第4章 壁塗り構文」影山太郎 (編)『日英対照 動詞の意味と構文』, 100–126. 東京：大修館書店.
岸本秀樹. 2005.『統語構造と文法関係』東京：くろしお出版.

岸本秀樹. 2019a.「軽動詞構文における意味役割付与のメカニズム」岸本秀樹 (編)『レキシコンの現代理論とその応用』, 99–126. 東京：くろしお出版.
岸本秀樹. 2019b.「軽動詞構文の移動現象―項上昇と名詞編入―」西原哲雄・都田青子・中村浩一郎・米倉よう子・田中真一 (編)『言語におけるインターフェイス』, 11–24. 東京：開拓社.
岸本秀樹. 2024.「第I部　構文と格」加賀信広・岸本秀樹 (著)『文の構造と格付与』, 19–108. 東京：開拓社.
黒田成幸. 1998.「主部内在関係節」平野日出征・中村捷 (編)『言語の内在と外在』, 1–79. 東北大学文学部.
北原保雄. 1981.『日本語の世界6 日本語の文法』東京：中央公論社.
熊本千明. 1989a.「日・英語の分裂文について」『佐賀大学英文学研究』17, 11–34.
熊本千明. 1989b.「指定と同定―「…のが…だ」の解釈をめぐって―」大江三郎先生追悼論文集編集委員会 (編)『英語学の視点』福岡：九州大学出版会.
久野暲. 1973.『日本文法研究』東京：大修館書店.
柴谷方良. 1978.『日本語の分析―生成文法の方法―』東京：大修館書店.
砂川有里子. 1995.「日本語における分裂文の機能と語順の原理」仁田義雄 (編)『複文の研究(下)』, 353–388. 東京：くろしお出版.
砂川有里子. 2005.『文法と談話の接点―日本語の談話における主題展開機能の研究―』東京：くろしお出版.
瀧田健介. 2020.「「-方」名詞節の構造」斎藤衛・高橋大厚・瀧田健介・髙橋真彦・杉村恵子 (編)『日本語研究から生成文法理論へ』, 128–142. 東京：開拓社.
田野村忠温. 1990.『現代日本語の文法 I ―「のだ」の意味と用法―』大阪：和泉書院.
野田春美. 1997.『「の (だ)」の機能』東京：くろしお出版.
原田信一. 1970.「補文標識の「の」」『季刊変貌』関東学院高校放送部OB同人誌, 31–24. (福井直樹 (編). 2000.『シンタクスと意味―原田信一言語学論文選集―』所収, 439–447. 東京：大修館書店).
平岩健. 2006.「第10章 分裂文」三原健一・平岩健 (著)『新日本語の統語構造―ミニマリストプログラムとその応用―』, 249–280. 東京：松柏社.
三上章. 1953.『現代語法序説―シンタクスの試み―』東京：刀江書院.
森山倭成. 2021.「In-situ focus文の構造」*JELS* 38, 72–78.
森山倭成. 2022a.『節の右方周縁部における線形順序と階層構造』博士論文, 神戸大学.
森山倭成. 2022b.「日本語の分裂文の統語特性」*KLS selected papers* 4, 57–72.
吉村紀子. 2001.「分裂文を八代方言からさぐる」『ことばと文化』4, 67–84.
Aoyagi, Hiroshi and Ishii Toru. 1994. On NPI licensing in Japanese. *Japanese/Korean Linguistics* 4, 295–311.

Den Dikken, Marcel. 2006. *Relators and linkers: The syntax of predication, predicate inversion, and copulas*. Cambridge, MA: MIT Press.

Fukui, Naoki. 1986. A theory of category projection and its applications. Doctoral dissertation, MIT.

Fukui, Naoki. Shigeru Miyagawa and Carol Tenny. 1985. *Verb classes in English and Japanese: A case study in the interaction of syntax, morphology and semantics*. Lexicon project working papers #3, Center for Cognitive Science, MIT.

Grimshaw, Jane and Armin Mester. 1988. Light verbs and θ-marking. *Linguistic Inquiry* 19, 205–232.

Harada, Masashi. 2016. Japanese pseudoclefts. *Kansas Working Papers in Linguistics* 37, 59–75.

Harada, S.-I. 1973. Counter Equi NP deletion. *Annual Bulletin* 7, 113–147. Research Institute of Logopedics and Phoniatrics, Tokyo: University of Tokyo.

Hasegawa, Nobuko. 1997. A copula-based analysis of Japanese clefts: *Wa*-cleft and *ga*-cleft. *Researching and verifying an advanced theory of human language, grant-in aid for COE research report* (1), 15–38. Kanda University of International Studies.

Hiraiwa, Ken. 2005. Dimensions of symmetry in syntax: Agreement and clausal architecture. Doctoral dissertation, MIT.

Hiraiwa, Ken. 2010. Spelling out the double-*o* constraint. *Natural Language & Linguistic Theory* 28(3), 723–770.

Hiraiwa, Ken and Shinichiro Ishihara. 2002. Missing links: Cleft, sluicing, and "no da" construction in Japanese. In Tania Ionin, Heejeong Ko, and Andrew Nevins (eds.) *Proceedings of the 2nd HUMIT student conference in language research*, 35–54. Cambridge, MA: MITWPL.

Hiraiwa, Ken and Shinichiro Ishihara. 2012. Syntactic metamorphosis: Clefts, sluicing, and in-situ focus in Japanese. *Syntax* 15, 142–180.

Hiraiwa, Ken and Yoshiaki Kobayashi. 2019. Countersluicing. *Syntax* 23(3), 295–312.

Hoji, Hajime. 1987. Japanese clefts and reconstruction/chain binding effects. Paper presented at WCCFL 6.

Hoji, Hajime. 1990. Theories of anaphora and aspects of Japanese syntax. Ms., University of Southern California.

Kaneko, Yoshiaki. 1988. On exceptional case-marking in Japanese and English. *English Linguistics* 5, 271–288.

Kikuchi, Akira and Daiko Takahashi. 1991. Agreement and small clauses. In Heizo Nakajima and Shigeo Tonoike (eds.) *Topics in small clauses*, 75–105. Tokyo: Kurosio.

Kishimoto, Hideki. 2001a. Locative alternation in Japanese: A case study in the interaction between syntax and lexical semantics. *Journal of Japanese Linguistics* 17, 59–81.

Kishimoto, Hideki. 2001b. Binding of indeterminate pronouns and clause structure in Japanese. *Linguistic Inquiry* 32, 597–633.

Kishimoto, Hideki. 2006. Japanese syntactic nominalization and VP-internal syntax. *Lingua* 116, 771–810.

Kishimoto, Hideki. 2007. Negative scope and head raising in Japanese. *Lingua* 117, 247–288.

Kishimoto, Hideki. 2008. On the variability of negative scope in Japanese. *Journal of Linguistics* 44, 379–435

Kishimoto, Hideki. 2009a. Topic prominency in Japanese. *The Linguistic Review* 26, 465–513.

Kishimoto, Hideki. 2009b. Syntactic status of idiomatic subjects in Japanese. *Nanzan Linguistics* 5, 41–60.

Kishimoto, Hideki. 2010. Subjects and constituent structure in Japanese. *Linguistics* 48, 629–670.

Kishimoto, Hideki. 2017. Negative polarity, A-movement, and clause architecture in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 17, 109–161.

Kishimoto, Hideki. 2018. Projection of negative scope in Japanese. *Gengo Kenkyu* 153, 5–39.

Kishimoto, Hideki. 2020. On the position of ECM subjects: A case study from Japanese. *Linguistica Brunensia* 68(2), 7–26.

Kishimoto, Hideki. 2021. ECM subjects in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 30, 231–276.

Kishimoto, Hideki. 2025. On the light verb construction in Japanese. In Anna Riccio and Jens Fleischhauer (eds.) *Light verbs: synchronic and diachronic studies*, 233–276. Berlin, Boston: düsseldorf university press.

Kiss, Katalin É. 1998. Identificational focus versus information focus. *Language* 74, 245–273.

Kizu, Mika. 2005. *Cleft constructions in Japanese syntax*. New York: Palgrave Macmillan.

Kuno, Susumu. 1976. Subject raising. In Masayoshi Shibatani (ed.) *Japanese generative grammar* (*Syntax and Semantics* 5), 17–49. New York: Academic Press.

Kuroda, S.-Y. 1988. Whether we agree or not: A comparative syntax of English and Japanese. *Linguisticae investigationes* 12, 1–47.

Matsuda, Yuki. 1997. A syntactic analysis of focus sentences in Japanese. *MIT Working Papers in Linguistics* 31, 291–310.

Miyagawa, Shigeru. 2020. Nominalization and argument structure: Evidence for the dual-base analysis of ditransitive constructions in Japanese. 于一楽・江口清子・木戸康人・眞野美穂(編)『統語構造と語彙の多角的研究―岸本秀樹教授還暦記念論文集―』, 18–44. 東京：開拓社.

Murasugi, Keiko. 1991. Noun phrases in Japanese: A study in syntax, learnability and acquisition. PhD dissertation, University of Connecticut.

Nakau, Minoru. 1973. *Sentential complementation in Japanese*. Tokyo: Kaitakusha.

Nishiyama, Kunio. 1999. Adjectives and the copulas in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 8(3), 183–222.

Nishiyama, Kunio, John Whitman, and Eun-Young Yi. 1996. Syntactic movement of overt *wh*-phrases in Japanese and Korean. *Japanese/Korean Linguistics* 5, 337–351.

Noguchi, Yuya. 2025. Asymmetries, covert *wh*-movement, and nominality in Japanese *wh*-questions. PhD dissertation, University of Connecticut.

Ouhalla, Jamal. 1999. *Introducing transformational grammar: From principles and parameters to minimalism*. *Second edition*. London: Arnold.

Postal, Paul M. 1974. *On raising: One rule of English grammar and its theoretical implications*. Cambridge: MIT Press.

Sadakane, Kumi and Koizumi Masatoshi. 1995. On the nature of the "dative" particle *ni* in Japanese. *Linguistics* 33, 5–33.

Saito, Mamoru. 2012. Sentence types and the Japanese right periphery. In Günther Grewendorf and Thomas Ede Zimmermann (eds.) *Discourse and grammar: From sentence types to lexical categories*, 147–175. Berlin: De Gruyter Mouton.

Sugioka, Yoko. 1992. On the role of argument structure in nominalization. *Language, culture and communication* 10, 53–80.

Takahashi Daiko. 2006. Apparent parasitic gaps and null arguments in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 15, 1–35.

Takahashi, Daiko. 2020. Derivational argument ellipsis. *The Linguistic Review* 37, 47–74.

Takahashi, Masahiko. 2021. Reconsidering the optionality of raising in Japanese exceptional Case-marking constructions. *Syntax* 24(2), 224–262.

Takano, Yuji. 2003. Nominative objects in Japanese complex predicate constructions: A prolepsis analysis. *Natural Language & Linguistic Theory* 21, 779–834.

Takezawa, Koichi. 1987 A configurational approach to Japanese case-marking. Doctoral dissertation, University of Washington.

Tanaka, Hidekazu. 2002. Raising out of CP. *Linguistic Inquiry* 33, 637–652.

Tatsumi, Yuta. 2013. A smuggling approach to Japanese cleft construction. *JELS* 30, 348–354.